速報！ 勇者の剣、盗んでみた。 ～魔王討伐、代わりにすることになりました～

神咲―kanzaki―

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「勇者の剣…うわ、すごい強そう。あと凄い高そう」

盗賊という天職を授かったソラは、王都で貴族や宝石商を標的に盗み稼業をして暮らしていた。

そんなある日王都にやってきた勇者の持つ勇者の剣にご執心！

隙を見て盗んでみたら、いきなり勇者の剣がしゃべりだして…？

「助かった！　あんたは救世主だ、お前こそ俺の新たな持ち手に相応しい！」

「え？　ええ??」

勇者パーティから逃げながら、魔王討伐を目指す!?　ファンタジー物語です。

※　週３投稿目指します。

※　なろう・カクヨム・アアルファポリスでも同時連載しています。

（なろうＵＲＬ　：　ｈｔｔｐｓ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ５４３４ｇｓ／）

目次

プロローグ
第1話　王都の影 ―― 1
第2話　絶好の夜 ―― 6
第3話　争奪戦 ―― 11
第1章
第4話　解放者、そしてその後 ―― 14
第5話　過去と決断 ―― 19

プロローグ

第1話　王都の影

『いつになったら金を納める？』
『すいません、もうすぐには…』
弱者は常に強者によって言いようにされる、私はそれを幾度となく見てきた。
強者は弱者の都合なんか考えない、考えるのは自分の利益と尊厳だけ。
母が貴族に蹴られ、殴られ…私はそれをただ見てるだけに過ぎなかった。
自分は、盗賊という天職を与えられていたというのに…。

★

王都の商業区、ここは昼間になると人通りがかなり増える。農業区で育てた野菜を売りに来る者、自分で織った衣服を売りに来る者、そしてそれを購入しに来る人、様々な人が入り乱れる。
私、ソラもその中の一人。フードを深々とかぶり、露店で買ったパンを貪りながら今日は何があるかを観察するだけの一般客。しかし見ている場所はそんな野菜やら衣服やらの場所ではなく、宝石やら金属類等が多く置かれている上級民族御用達の区画だ。
別に大金があるわけでもない自分が、何故そのような区画にいるのか…理由は一つしかない。
「お母さん、今日はこんな品を取り寄せたぜ？　どうだ？」
「あらま、素敵ね！」
目の前で宝石商と貴族の女性が幸福そうな会話を見せている。何一つ不自由のなく、寧ろ贅沢をする余裕がありそれを当たり前と感じている様な顔。その顔を見ると私は非常に気分悪くなる。
それも過去があるからだろうか？　今となってはそれも良い思い

出話にすぎないが。
「さてと、仕事するかなっ」
　その宝石商と貴族がいる露店目掛けて勢いよく駆けだす。
「…ほいっと！　おじさん隙だらけっ！」
「きゃ？　何、何ですの!?」
「あ、テメエ、オイ！　またお前か！　待ちやがれ！」
　宝石商の露店を飛び越え、背後にあった宝石の箱を担ぎ逃走する。
周りもこちらに気づいたのか様々な表情をする。
「何、賊？　こんな王都で？　度胸ある子ね」
「アイツ、この辺じゃちょっと有名だぜ。おい、誰か兵士呼んで来い！」
「危ないから逃げましょ」
　戸惑う者、怒る者、逃げる者、追う者、ここ王都には様々な表情が垣間見える。中でも上級民族が戸惑ったり、逃げたりする時の表情を見るのは個人的に快感である。何しろ普段他人を見下している顔が、一瞬にして崩れ去るのだから。
「いたぞ、例の白銀の盗賊だ！　今度こそ逃がすな！」
「追いつけるものなら追いついてみなよ！」
「クソ、毎度の如くはえぇ！」
　いつの間にやら兵士達に存在を知られる程になっていたようだ。
　短い銀髪を揺らし、王都での盗み稼業を常日頃からやっていたことから、白銀の盗賊などと呼ばれるようになってしまった。自分は別に何にも思っていないのだが。
「ほんっと毎度毎度しつこいなぁ。…荷物も重くなってきたし、そろそろトンズラするね！」
「貴様、待て！」
「せ～の……《盗賊スキル：超飛躍》！」
　足に魔力を巡らせ、地を蹴り上げ家の屋根にまで飛躍する。このルートは毎度の如く使っており、屋根まで上れば裏路地の方に逃げ込んでそのまま抜け道を通って王都から少し離れた隠れ家まで移動することができる為、追手を回避しやすい絶好のルートとなっている。

屋根を伝い、ちょうどいい場所で飛び下り、路地裏に着地する。
着地した先の目の前には私みたいな盗人御用達の闇商店がある、ここで盗んだ宝石や金品は売り払うのだ。
「…ん、おぉ、ソラか。また派手にやったようだな！　ガハハ」
「まだ追われ中だから、余り大声は出さないで。ほらっ、今日の品だよ。出来るだけ早くお願い」
「はいよ…にしても、お金の方まだ足りねぇのか？　あんたの母親も大変だな」
「幾らあっても足りないよ…お金なんて」
盗んで得たお金の７割は母に仕事で得たお金と称して送っている。盗んでお金を得たと言ったら、それこそ忌み嫌われて、母にまでその被害が飛ぶかもしれない。
私みたいな弱者は、こうして生きていくしかない。でもバレてしまっては元も子もない。
本当に、生きづらい世の中だ。
「ほらよ、金貨１５枚に銀貨３０枚だ。普通ならもっと少ない額だが、まぁ今回は特別ってことで…」
「うん、ありがとう。母なら１年くらいはもつかな」
「それくらいヤバイのか」
「借金とか家の代金とか、色々ね」
闇商人に礼を言い、静かに外へ出る。兵士の声は聞こえなくなっていた、先ほどまであんなに元気だったのに、どうしたというのか。
盗賊程度に時間を割けないと言えばそれまでだが、呼び名までつけられた程の常習犯を数分程度であきらめるだろうか？　王都の方針で考えたら十数年くらいは牢獄入りなくらいやっている筈なんだが。
『――見て、勇者パーティよ！』
『噂通りの美形だな、羨ましいぜ』
『他の仲間も強そうだな』
――そんな時、中央通りの方が騒がしくなっていた。どうやら勇者パーティというのがやってきたらしい。噂程度にしか聞かないが、実際どういった存在なのかは余り知らない。

「勇者パーティが来たか。何やら王から直々に魔王討伐を命じられた勇者の血を持つ男とその仲間たちって話だぜ？　何やらその仲間にも魔王を倒せるほどの技量と器があるとかなんとか？　詳しい話までは知らねぇが」
「ふ～ん？」
　闇商人が騒ぎを聞きつけ、私にそう話す。勇者…闇商人の話では、それは王の次につく地位だという。もうそれだけで腹立たしい気分になる。
「ちょっと様子見てくる。《盗賊スキル（ハイジャン）：超飛躍（ジャンプ）》」
「おぅ、見つかるなよ～」
　屋根の上に飛躍し、その陰から中心街の様子を眺める。鎧を着た金髪の男に、魔法衣を着た女性が二人、大柄な男が一人といった感じか。旅の途中で魔物なんて幾らでも倒しているだろうし、金ぐらいは多少持っていそうだけど…。
「さすがの歓声ね、ジャック」
「ははは、当たり前だろう？」
「あまり調子にはのるなよ」
「皆さん、歓迎ありがとうございます」
　他の仲間たちは至極どうでもいいが、勇者と思われる方の男が見せるあの愉悦な顔は私にとっていい気分はしなかった。何か盗まれて酷い目にあってもらいたい所だが、これから王城に侵入するであろう勇者パーティに盗みに入るなど、可能ではあるだろうがリスクがでかい。わざわざ動く必要はないだろう。
　と、屋根から降りようとした時、勇者パーティのある会話が耳に入った。
「勇者の剣も手に入った事だし、これで魔王討伐に一歩近づいたという訳だ」
「試練っていったけ、スゴイ苦労したわ。早く城に行って休みましょ」
「ええ、私も疲れました」
　…勇者の剣？　何それ、めっちゃ気になる。
　振り返り、勇者の方を見ると、その手には魔法石と思われる装飾が

取り付けられ、刀身からは強い魔力を微かに感じられるような剣が握られていた。アレの事を言っているのだろうか？　まあ確かにこの辺じゃ見かける事は絶対にないだろうが。
「…材料もってって鍛冶屋に頼めば再現できそうな感じはするけど…とりあえず《盗賊スキル：解析眼》」
　アイテムの材質等を解析するスキルでその剣を覗き見る。基本的に解析できない物はない優れものなのだが…。
「解析不能…まじ!?」
　信じらんない、この眼ポンコツ？　いや、自分の眼に何言っているんだ自分は。
　でも私の眼をもってしても解析できないという事は…つまり。
「本当に勇者の…剣？　うわ、めっちゃ強そう、あとめっちゃ高そう…あれを売れば、もしかしたら…」
　盗んで売り払えばそれこそ闇商人に言っても出せる筈がない金額だったり、一生過ごせる程の金額になるかもしれない。
「盗んで売って金を送れば…何とかなるかもしれないな。…そうと決まれば、やる事は一つだ」
　バレないように屋根を下り、王都の影へと消えていく。そうこっそりと。
　相手は勇者パーティ、相当警戒心は強い筈。なら策は練っておくに越したことはない。
　でもこれを果たす事ができたなら、私の目標は達成されるのかもしれない。
　そう考える私は、これから命がけの争奪戦を行うというのに…どこか笑っていた。

第2話　絶好の夜

『ただいま、お母さん。今日の分…』

私の故郷は寂れた小さな集落だった。私が生まれてすぐに「王からの命令」と称して貴族に牛耳られた為、全住民は苦しい生活を強いられていた。

そんな境遇だったからこそ、私は貴族や上級民族を酷く嫌っている。

『こんなに沢山…大変だったでしょ？　働き先もよく見つけたね』

『…ま、まあ、特に苦労はしなかったよ。…もしかして、私の天職が盗賊だから…とか？』

『幼い頃に小さな盗みを働いた時から、少し嫌な予感はしていたの。ねぇ、本当に大丈夫なの？』

母の言葉一つ一つが私の心に突き刺さる。本当は働いてなどおらず、必死に盗み稼業をして生きているなんて、絶対に言えるわけがなかった。

でも、生きる為にはこうするしか私達には残されていなかった。

『…だ、大丈夫だよ。それに盗賊ってね？　悪い意味だけど、物を運ぶ事も多い天職だから、比較的力も強いんだよ？　配達の仕事とか必死にやってたら、これくらいは行くって、王都だしね！』

『そう？　…ならいいけど』

それっぽい嘘をついて適当にごまかす。故郷に帰ってする会話がいつもこんな感じだった。

『…仕事も大変だし、余り長居はできないけど、ごめんね？』

『いいのよ。娘が頑張っているってだけでも、私は嬉しいから。でも…絶対に、他の人に迷惑はかけないでね？』

『う…うん、勿論だよ』

★

「…お母さん、ごめん。これも全て…お母さんの幸せの為だから」

他愛もない過去を思い浮かべながら、屋根の上で夜の王都を眺める。

王都の夜は静かだ。

酒場のある南東部は比較的賑やかだがそれ以外は見るも無残な感じである、つまり行動するには絶好の機会という訳だ。

まぁでも当然の如く王城への入り口は頭のお硬い兵が常に待機している、出来るなら侵入の時に大事は避けたい物だ。

「…時間に余裕のない勇者パーティなら出発は恐らく早朝。盗むのならやはり夜のうちにやらないと行けないけど」

不幸な事に勇者パーティーは王城の中に入ったきり戻ってくる様子はない。どうせ奴らの事だ、王や王妃にもてはやされて宴やら駄弁りやらして泊っていく流れなんだろう、つまりこちらに残された時間はそう多くはない。

盗賊としては非常に迷惑な話なのだが。

「うぅ～ん…どうした物かな。中心街の大通りから加速して逃げるとなると、人が少ない今が一番いいんだけどなぁ」

城には上から侵入できそうな所が複数あるが、そこにも兵士が一人づつ配置されている状況。二人で待機している入口よりかは遥かにマシだが。

「……まぁ結局最後は強行突破しかないよね。あんな腹立つどや顔してるとはいえ、勇者は勇者なんだし。後の事は城に入ってから考えよ。終わりよければ全て良しだしね」

ひょいっと屋根を飛び下り路地裏の影から《盗賊スキル：超飛躍》で登れる圏内の所まで接近し兵の様子を伺う。こっからでも分かる通り、中の様子を羨ましがるような顔している、どうせ一兵卒の奴なんだろう。

「私みたいに飛んでくる奴もいるんだから、一兵卒に警備させるの止めたらいいのにって毎回思うんだけどね。ま、有難いし良しとしよう。さぁ～ってと、《盗賊スキル：超飛躍》！」

一回の飛躍では絶対に届かないが、途中の壁を経由して登れば何てことはない。

本当に超飛躍は便利だ。２年前に宝石商から金を盗んだ際に修得して以来ずっと愛用している。

★

「はぁ…中は勇者パーティと王に王妃、挙句の果てには隊長まで入れた宴祭りか。羨ましいなぁ、こんな所警備して何になるんだよ、たくよぉ」

城を登りきって兵の背後に到達する。何になるって、私みたいな奴がいるからでしょうに。

まぁ位の高い奴らばっかり優遇される気持ちは本当に分からなくもないが、今は盗み仕事中なのでそんな同情はしていられない。

「失礼しますよっ……と！」

「ん……何だ貴様…がっ!?」

首元を短剣の鞘で強く突いて兵を地につかす。あくまで侵入の為の処置だが起きる前に盗んでしまえば問題はない。

「さて、一先ず侵入したはいいけど、中で見つかっても厄介ね。……あそこの窓から中の様子見れたりしないかな」

屋根の方に移動し、他の兵士に気を付けつつドーマーから中の様子を覗く。先ほどの兵士が言っていたように、そこから王族と勇者パーティーが会話しながら豪勢な宴を開いていた。

「どうだね？　魔王討伐の方は」

「ははは！　心配いりませんよ、王よ。勇者の剣も手に入れる事に成功し、後は盾を見つけて魔王城に乗り込むだけです」

「全く、ジャックは調子に乗って…」

「こういう時くらい、良いじゃないですか？」

「そうだそうだ!!」

笑い声が聞こえる、聞いてる側はちっとも笑えないし、寧ろ腹が立ってくる。

私みたいな他の下級都民の事など一切考えない至福のひととき。もうこれだけで反乱が起こせるんじゃないかと少しばかり思えてくる。

幼い頃、私はああいう食事に心から憧れていたんだ。今ではそれが

手に入るかもしれないという想いに捕らわれていて、前以上の憧れは感じていないのだが。
「あぁ…そのことを考えると余計にムカついてきた」
頭をかいてボヤく。もうこのまま突入してやりたい気分を抑え落ち着こうとする。……が
「…はぁ、声がここにまで聞こえてくるぜ。…って、おい！　貴様何をしている！」
「…あっ」
イラだちからか反対側の兵士の事をすっかり忘れてしまった。勇者たちの大きな笑い声のせいなのもあるだろうが、自分のこの短気な所にも足をすくわれる。
「王城に侵入か？　愚かな賊だな」
「こいつ、例の白銀の盗賊じゃないか？　手配者だ！　応援呼べ！」
「不味い…」
下りて逃げるか？　いやここで逃げてしまってはここまでの侵入も全部水の泡。それに中の宴の様子も件によって不穏な物へとなっている。
母と生活の為にも、それは絶対に避けなければならない。
つまり、今自分に逃げるという案は残されていない。
捕まって牢で過ごすか、或いは…。
「…なら、答えは一つ」
「何を！」
短剣の鞘を向け、そのまま身体ごとドーマーの窓ガラスを破る。身体は私の髪と同じ色をした綺麗な硝子の破片と共に、王と勇者パーティーのいる部屋へと落下する。
「なっ…何事だ！」
「王！　この容姿、盗賊です！　ここは俺らにお任せを」
「アンタ、ここが王城だと分かっての行為かしら？」
勇者パーティは私に鋭い視線を向ける。王都にいる民達は奴らがこんな顔をするなんて思ってもないだろうな。
勇者とはまるで真逆な汚い眼だった。

「勿論わかってる。でなきゃバカでもここに来ないよ」
「貴様、何が狙いだ。ここに侵入したその罪、ただでは済まぬぞ？」
「狙い…？　それはもちろん……」
「金になりそうなその剣さ！」
私は勇者の剣に指をさし、それ目掛けて一閃に駆けだした。

第3話　争奪戦

「ただの盗賊なんて、一節魔法で余裕よ！　氷の精よ来たれ、氷塊（ラグラス）」
「援護します！魔力付与（マジックエンチャント）」
「《盗賊スキル：超移動（ハイムーブ）》！」
　黒魔術師の女性が放つ強化された氷塊を超移動（ハイムーブ）で避ける、超移動といってもその移動距離はほんの二歩分の距離。だが魔力が尽きなければ連続使用が可能の回避スキル。
「なっ、避けられた！」
「魔力が弱いからって舐めないでよ！」
　盗賊は魔力の成長が他より劣っている。元々技術で物を言わせる天職だからかもしれないが、盗賊をやっている自分からすればデメリットとは思っていない。他の盗賊がどうなのかは定かではないが。
　超移動を2回使用し、勇者の眼前に迫る。
「取ったよ！」
「舐めるな盗賊風情が！《勇者剣スキル：風王斬（ファスタバスター）》！」
「闘士の俺も忘れるな！《斧スキル：覇王斬（はおうぎり）》！」
「ここで勇者の剣振るうって正気!?　…ッチ、《盗賊スキル：超移動（ハイムーブ）》！」
　馬鹿かこの勇者は、ここ王城の広間だぞ？　いくら広い場所だからって力の大きい勇者の剣を振るう奴がある？　周囲の仲間も止めようとしてないし…。
　それに、超移動（ハイムーブ）も起動はしたものの挟まれた一撃に対処しきれず、腹部と背中に斬撃をくらってしまった、幸い死ぬほどではないが。
「これが勇者パーティね、ちょっと舐めてたかも」
「俺達に喧嘩うったこと、後悔しろよ？」
「それはこっちのセリフ……《盗賊スキル：超加速（ピード）》！」
「!?」
　地を蹴り、それこそ一瞬の如き速さで再び勇者の眼前に迫る。
　腰に入れていた短剣の鞘に手を置き、本気で盗みに入る。
「速っ!?」

「嘘…魔術詠唱が間に合わない!?」
「盗賊は敏捷性だけが取り柄なんだよ！」
　そっちも武器のスキルを使ってきたんだ、こっちも遠慮なくいかせていただこう。
「《短剣スキル：感電刺剣》！」
「がっ……！」
　短剣スキル：感電刺剣は麻痺効果のある短剣のスキル。一時的に止まる勇者の隙をつき、手に持つ勇者の剣を奪い取り、即座に離れる。
「な、しまっ…」
「ははっ、貰いっと！」
「何やってんのよジャック！」
「俺のせいじゃねぇだろ！」
「落ち着きましょう！」
「喧嘩はよせ、それよりまずはあいつを…」
「……はぁ、貴方達本当に勇者パーティなの？　ちょっと期待外れかも」
　盗んだ勇者の剣を腰につけた仮の鞘に納め、その場にいる者全員に鋭い言葉を投げる。
　見てらんない喧嘩を止める為でもあるのだが、これは自分の率直な感想だった。
「…は？　何言ってんだ。当たり前だろ？　盗賊風情が俺達を見下すのか？」
「言葉をわきまえ、その剣をこの場に返上しろ。今なら軽い刑で済むかもしれんぞ？」
「だってさ、私のようなただの盗賊に、勇者が一番大切な物盗まれてるじゃん。しかもそっちは４人いるのに…。あと私、一度奪った物は返さない主義だから」
　その言葉で勇者パーティの怒りが更に加速した。
「だったら取り返すまでだ盗賊風情が！　《剣スキル：雷神斬》！」
「後悔しろ賊の者！　《一斧スキル：大地砕き》！」
「炎の精よ、我に知と力を与え、ここに地獄を作り出さん！

炎熱地獄(ヘルディアス)」
「み、皆さん!?」
え、嘘ホント？　さっきもいったがここ室内だよ？　白魔術師だけがまだまともなのは良かったが。
「ホント馬鹿な奴ら！《盗賊スキル(ハイス)：超加速(ピード)》！」
部屋の扉に超加速の速さで飛び込み、その部屋から離脱する。部屋にいた王妃と王だけはとりあえずギリギリ掴んで部屋から離す事は出来た。
なぜ助ける必要があるのか？　まぁ死なれたら王都の人達はもちろん私までも気分が悪くなるからだ。
その瞬間、部屋から3人の攻撃が放たれ広間一面に爆風が走る。絨毯と机は焼け、シャンデリアは衝撃で落下し、見るも無残な状態である。
「あっぶない。他の人の事も考えないの？」
「き、貴様…」
「…はぁ、自分たちの身より剣と勇者の心配？　大変だね。それじゃぁ、私は今のうちに逃げさせてもらうので！」
「待て！」
立ち上がり、超加速(ハイスピード)で城を離脱する。多分この程度で勇者パーティが死ぬ事はないだろうが、暫くは追ってこない筈だ。
一先ず「勇者の剣を盗む」という目的は達成した。追ってくるというのなら、先に売り払って母に送ってしまえばいい。
そうすれば、私なんて用済みでしかないのだから。

第1章
第4話　解放者、そしてその後

斬られた腹と背中が酷く痛む、逃げるのにも精いっぱいだった。
《盗賊スキル：超加速》はその単純さとは裏腹に消費する体力が異常である、まぁ常人には考えられない程の速さで長距離を走るのだから、当然と言えば当然なのだが。
「あの人達、周りの事見えなさすぎでしょ」
息を切らし、自分の隠れ家へとたどり着く。王都から少し離れた小さなロッジ、空き家になっていた所を私が勝手に使っている。外の様子も窓から眺める事が出来るので、暫くは安全だろうと安堵する。
腰につけた勇者の剣を鞘から取り出すと、窓から差し込む閃光によって付けられた魔法石がきらりと輝く。
「良い値打ちがつきそうだね。北の方の帝都に大きな家建てれるくらいにはなりそうだけど…。ま、今の生活で十分だしそれは無しだね」
妄想は止まらない、がそのどれもが贅沢な物に行きついてしまい躊躇う自分がいる。贅沢な生活をするという事はつまり他の人から見たら裕福な貴族と同じように観られてしまう、それはかなり嫌な気分になる。
かといって、この剣を売ったとして得られる金も今の生活だけで捌ける気がしない。どうした物か…。
「ふぅ…ん？」
ふと気づく。盗んだ勇者の剣が微かに光を放っている。別に魔力を送り込んでいるわけでも、何かスイッチのような物を押したわけでもない、ただ剣が何の前触れもなく光出したのだ。
「何？　爆発!?」
盗まれたときの対策だろうか？　いやそんな筈はない。だったら偽物を持ち歩いた方が断然いい。
じゃぁこれは何か？　距離をとった私は期待と不安でいっぱいになっていた。

……暫くすると。
「……や、……り……う」
「ん？」
「いやぁ、どうもありがとう！　あの男から僕を離してくれた事を！」
「…喋った!?　何、魔物!?」
「魔物ではない！　勇者の剣だ！」
　いやいやいや、理解が追い付かないよ。勇者の剣が光出したのはまだいい、そういう魔力が込められているかもしれないからだ。
　でも喋るというのはいくら何でもおかしい、馬鹿げている。
「…傷の痛みで私頭おかしくなっちゃった？」
「現実だ！　現実!!」
「現実…？」
「そう現実だ。君はあのクソみたいな勇者から僕を引き離してくれた、すごい感謝している」
「酷い言われようだね…まぁアレを見たら否定できなくなったけど。…で、なんで勇者の剣は喋るの？」
「話すとちと長くなるが…」
　長い話を要約すると、勇者の剣というのはかつて昔、魔王を討ち果たした勇者が後世にて魔王と同等の力を持つ者が現れた時の為、自分の持つ剣に力と魔力、そして魂を吸収し、神聖なる地の台座に納められたという。
　…ん、それってつまり。
「あなた、もしかして初代の勇者!?」
「あぁそうだ。今はこうして勇者の剣となり、代々勇者の力となっているというわけだ。まぁ、今回の勇者たちはあの調子だが…」
「う、うん、そうなんだ…」
　盗賊であり、しかもその勇者の剣を盗んだ私にそんな話をされても意味がわからないのだが。
　というか、こいつは私が盗賊であるというのを知っているのだろうか？
「ねぇ、一応言うけど、私盗賊だよ？　離してくれたって言うけど、私

はただ勇者の剣を盗んだだけで…」
「え？　勇者から盗み出したっていうのかい？　相当な技量じゃないか。やはり…ふむ、そういうことか」
「あの？」
「よし決まりだ！　君、魔王討伐に興味ないか？　君こそ次なる僕の担い手に相応しい！」
「え？　ええ??」
　突然言われた魔王討伐のお願いに戸惑う。元々母への金の為に盗んだからであって、そんな使命を担う為に盗み出した訳ではない。
　そもそも私にそんな資格がある筈がない。
「実はな魔王討伐というのは、誰でも行えるというわけではない」
「それは誰でもわかると思うけれど…」
「勇者の天職を持つ者…そしてそれ以外に『天職の解放者』という力を持った者だけが成せる所業なのだ」
「か、解放者？」
「与えられた天職の力の限界を越えられる者、それが『天職の解放者』だ。君も、勇者パーティにあっているだろう？」
「…まさか、あの魔術師達と闘士も？」
「そういうことだ。そして私は、人を見ただけでその者が解放者かどうかが分かる力を持つ。つまり君だ、君は盗賊の解放者という事になる」
「私が？」
　天職の限界、それは即ち成長の限界という事だろうか？
　確かに他の盗賊より敏捷性に富んでいたが、もしかしてそれが恩恵と言える者か、勇者パーティーの猛攻をギリギリながら避け続けられたのも。
「…私にそんな力が」
「うむ。して、どうだ？　魔王討伐の件は」
「うん、とりあえず貴方を売って母にお金送っていつもの生活に戻ろうかな？」
「心は優しいけど僕の扱いが酷い!!」

★

一方王都では、既に勇者の剣が盗み出された事で大騒ぎとなっていた。

盗んだ者を捕らえた者にはそれなりの報酬が出る、というお決まりの文句まで配られ冒険者たちの中には既に探しにいく者すらも現れる程であった。

そして王城の中は、既に一連の騒動についての会議が行われており、勇者たちもそれに同席していた。

その最中でも、勇者ジャックは苛立ちを隠しきれずにいた。

「そういうわけだ。勇者の剣を取り戻し次第、魔王討伐の再開といこうか」

「ッチ…わかった」

会議が終わり、ジャックは扉を蹴り開け、会議室を後にする。他の勇者パーティも呆れながらそれについていく。

苛立ちを募らせるのは当然だろう、勇者という全天職の頂点にいる自分でありながら、下級天職である盗賊なんかに敗北を喫したのだから。

「…クソが！」

ドンッ。

怒り全てを込めた拳を城の壁に突きつける。その音は下の階層にまで響き渡った。

やりすぎたと感じたのか、顔は少し正気に戻るが、それでも苛立ちが消える事はなかった。

「この俺が…勇者である俺が、あんな奴に負けるだと？」

「…悔しいのはわかるが、奴の俊敏さも伊達ではなかった。そこは褒め称える所だろうか？」

「黙れ！」

闘士の解放者であるギデオンはそのセリフにビクッとなる。黒魔術師のメルディも勇者と同じく苛立ちこそあるが、顔には出すまいと

必死になっている。
「勇者様…ここは少し落ち着かれては？」
「白魔術師風情が俺に指図するな」
「っ」
「…消してやる。ただ奪い返すだけでは足りない」
プライドが高い勇者に今かける言葉など、誰も思いつかなかった。
それだけ言い残した勇者は拳を握り、一人先に部屋へと戻る。勇者パーティはそれぞれ思う所がありつつもそれを見送った。

第５話　過去と決断

「本当に魔王討伐に興味がないのか？」
「無いね。魔王なんて、勇者パーティに任せればいいと思ってるし」
「勇者の剣を無くした奴らが、勝てるとは到底思えないが」
「…」
　それは確かに一理ある、とすれば勇者パーティは必ず私を探し出して奪い返しに来る筈だ。
　ならば私としては早いとこ勇者の剣を売り払い母に送るのが最適解だろう、わざわざそんな危険を冒しに行く理由はない。
「…もし、魔王が倒されずに生き続けたら、どうなるの？」
「そりゃ勿論、迎えるのは破滅だけだ。人は皆死に絶え、残るは果てた大地だけ。良い事は何一つない」
「そうだとしても、私がわざわざ出向く必要もないでしょ。私は自分と母が幸せに暮らせるだけの金があれば十分なんだ」
「…そうか。ならこういうのはどうだい？　代々勇者は、魔王討伐後に富と名誉が手に入る。君の望む金も手に入り、地位も今より更に高くなる」
　私は地位という言葉を聞いた瞬間、つい頭に血が上る。
　勇者の剣を床に投げつけ、無意識に言い放つ。
「金はいい、でも地位なんてものはいらない！　もしそれで貴族や勇者の奴らと同じになったら…それこそ、死んだほうがマシかもしれない」
「…そうか、君はそういう人たちが苦手なのかい？」
「苦手の上、嫌いなの。弱者を常に見下し、自分の利益しか考えないような奴らなんて…生きている資格なんてない」
　全部吐ききった所でハッとなり我に返る、短気な性格は一行に治る気配はないようだ。
　勇者の剣に「忘れて」と言い、窓の方を見る。王都の兵士たちが周囲を厳重警戒している様子が見て取れる。これでは闇商人の所へも迂闊に行けそうにない。

つまり、嫌でもこの勇者の剣と暫く一緒にいないといけないというわけだ。
「…そこまで嫌っているとは思わなかった。僕の方こそすまない事を言った。だが、それなら地位を得なければいい」
「…どういうこと？」
「魔王を倒せば、君は王に感謝されるだろう。もしそうなったならば、少しは政治や政策にも口を出せる立場になるだろう、実際私もその立場になった事がある。当然反対意見も多かったけどね」
「私が…新たな未来を作れる、と？」
「そうだ…いや、未来じゃないな。世界を作れるのだ、君の望む理想郷を、な！」
理想郷…私の望む理想郷。それはつまり、貴族や村民等の格差も無く、差別もなく、誰もが笑顔で笑いあい生活できるような世界にできるというのか？
さすがに誇張しすぎているが、勇者の剣が言うには大体そういうことなのだろう。
確かにそれは、金で買えるような物でもない。
「…成程」
「どうかな？」
「確かに、私の思うような明るい未来を作れるのならば、命を懸ける理由はあるかもしれない」
「だろう？」
椅子に腰をかけ、天井を仰ぐ。
「私、さ。小さい頃、故郷を支配していた貴族のポケットから宝石を盗んだことがあってね、天職のサガっていうのかな。その宝石を母に渡したら、スゴイ嫌な顔をされたよ」
「成程、確かに自分の娘が悪事をしたとなると、嫌な思いの一つや二つする物だ」
「うん、実際私もその自覚はあったから分かるよ。そしてその時に言われたんだ、『もう二度とこんなことしないで』って」
親は私を盗賊としてではなく、心優しい村娘として育てたかったの

だろう。でも、それは結局叶う事なんてなかった。もし故郷が貴族に支配されてさえいなければ、それは変わっていたのかもしれないけれど。

「…でも、その約束は守れなかった。結局、私達みたいな何もできない弱者は、こうでもしないと生きる事ができなかったんだ…！　どこへ行っても、天職が盗賊って知った途端に悪者や除け者扱いにされる。それならいっそ、こうやって盗み稼業をして生計を立てた方が稼げるって思ったんだ」

「…君は」

「…ごめん、気が高ぶりすぎた」

　気づくと、涙が流れていた。今まで心の中に秘めていた物全てを吐ききったからだろうか？　でも、少し身体にかかっていた重みが外れ、身体が軽くなったように感じる。

「…貴方のいう魔王討伐…もしかしたら、母との約束を果たす良い機会なのかもしれないね。人の為にもなり、私の為にもなる。自分の命を懸ける分、得られる対価も確かに多い」

「ということは…」

「…うん、受けるよ。私にできるというのなら」

「…ありがとう、やはり僕の見込んだ通りだ」

　実を言うと、あまり深くは考えずに、答えを出してしまった。

　でも、後悔はしていない。これでもし魔王討伐を果たして、誰もが笑って幸せに暮らせるようになるというのなら…、私の命なんて軽い物だ。

　こうして、私は新たな道を歩みだしたのだ。